

レーニン選集

10

マルクス＝レーニン主義研究所訳



レーニン選集 第10冊 ¥ 200.

1958年2月28日 初版発行

1959年4月25日 2版発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の15

電話 (92) 3091・7887

振替 東京 16387

三晃印刷・田中製本

目次

党綱領についての報告 一九一九年三月十九日にロシア共産党 (ボリシェヴィキ) 第八回大会でおこなったもの……………	五
農村における活動についての報告 一九一九年三月二十三日……………	二七
第三インタナショナルとその歴史上の地位……………	四四
ハンガリーの労働者へのあいさつ……………	五三
偉大な創意——銃後の労働者の英雄主義について「共産主義」 土曜労働について……………	五七
コルチャックに勝利したことについて労働者と農民に おくる手紙……………	八
労働者国家と党週間……………	八九
プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治……………	九三
燃料危機とたたかえ 各地の党組織への回状……………	一〇三

農業コンミューンおよび農業アルテリ第一回大会での 演説 一九一九年十二月四日……………	二六
デニキンに勝利したことについてウクライナの労働者 と農民におくる手紙……………	二六
アメリカ新聞『ニューヨーク・イヴニング・ジャーナ ル』通信員の問いにたいする答え……………	二三
労働規律について……………	二六
ロシア共産党（ボリシェヴィキ）第九回党大会—— 三月二十九日の中央委員会報告……………	二七
古い経済制度の破壊から新しい経済制度の創造へ……………	二七
事項注……………	一五一
人名注……………	一五五
解説……………	一五九

はしがり

- 一 この選集は、ソ同盟マルクス・レーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクス・レーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。
- 一 翻訳には現行版としてもっとも權威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末に示してある。
- 一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中「ハ」内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。
- 一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。
- 一 訳出には全集刊行委員会の訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。

党綱領についての報告

一九一九年三月十九日にロシ
ア共産党（ボリシエヴィキ）
第八回大会でおこなったもの

（拍手）同志諸君、私と同志ブハーリンのあいだで打ちあわせた分担によって、私にわりあてられたのは、もつとも論議の多い、あるいは現在のものもつとも大きな関心を引いている、いくつかの具体的な論点について、小委員会の見解を説明することである。

私は、同志ブハーリンが、彼の報告のおわりで、われわれ委員のあいだで異論があった点だといって触れた諸点から、簡単にはじめることにする。その第一は、綱領の総論部分の構成の性格の問題である。私の考えでは、古い資本主義を論じた部分をすっかり削除した綱領をつくらうという試みを、小委員会の多数がすべて拒否した理由を、同志ブハーリンはこの席上で十分にたたく述べなかつたとおもう。同志ブハーリンの言いかたには、

まるで小委員会の多数が、そうしたなら人になにか言われはしないかとおそれ、自分たちが過去にたいして十分の敬意をはらっていないと責められはしないかとおそれていたかのように、とれるところがときどきあった。小委員会の多数の立場をそういうふうに述べれば、この立場がきわめてこっけいにおもわれることは、疑いをいれない。だが、それは真実からかけはなれている。小委員会の多数がこれらの試みを拒否したのは、それがまちがっているからである。それは、現実の事態にそわないことになるであろう。資本主義という基礎をもたない純粋の帝国主義などは、かつて存在しことはないし、どこにも存在しておらず、今後もけつして存在しないであろう。もし、古い資本主義の基礎をすこしももたないもののようにえがきだすなら、それは、シンジケートやカルテルやトラストや金融資本主義についてこれまで言われてきたことのすべてを、まちがって一般化するものである。

それはまちがいである。とくにそれは帝国主義戦争の時期と帝国主義戦争後の時期にとつては、まちがいであろう。すでにエンゲルスが、きたるべき戦争について論じた一考察のなかでこう書いた。三〇年戦争のあとに荒廃よりもひどい荒廃がおこるであろう、人類ははなはだしく野蛮化するであろう、われわれの精巧な商工業の

機構は破綻するであらう、と【選集、第一七】。戦争のはじめに社会裏切者と日和見主義者は、資本主義の生命力をほこつて、「狂信者または無政府主義者」——彼らはわれわれをそう呼んでいたのだが——をあざけた。彼らは言った、「そらみたまえ、これらの予言は実現しなかつた。これらの予言は、ほんの小部分の国について、ほんのわずかな期間正しかつただけであることを、諸事件はしめた」と。ところが、いまでは、ロシアばかりでなく、またドイツばかりでなく、戦勝国でも、現代資本主義のきわめて大がかりな瓦解がはじまつていて、いたるところで、この精巧な機構をとりのぞいて、古い資本主義を復活させているほどである。

同志ブハーリンが、資本主義と帝国主義との瓦解の純一の描写をあたえる試みが可能であると述べたとき、われわれは委員会で反論した。そして、ここでも私は反論しなければならぬ。まあやってみたまえ、そうすれば、うまくいかないことがわかるであらう、と。同志ブハーリンは、委員会ですういう試みを一つやってみたが、自分でそれを断念してしまつた。もしだれかそういう試みをやれる人があるとすれば、だれよりも同志ブハーリンこそその人であると、私はまったく確信している。同志ブハーリンは、この問題を非常にたくさん、また非常に

くわしく研究してきたからである。課題がまちがつているから、そういう試みはうまくいくはずがないと、私は断言する。いまロシアでは、帝国主義戦争の諸結果とプロレタリアートの独裁の端緒とを経験している。それと同時に、以前にもましてたがいに切りはなされているロシアのいくたの地方の、いたるところで、われわれは、資本主義の復活と、その初期の段階の発展とを経験している。この状態からぬけだすわけにはいかない。もし同志ブハーリンの希望しているようなやりかたで綱領を書くとしたら、その綱領はまちがつたものとなるであらう。せいぜいうまくいって、それは、金融資本主義と帝国主義とについてこれまで言われてきた最良のものを再現するであらうが、現実を再現しはしないであらう。なぜなら、この現実には、まさにそういう純一性などはないからである。異質的な諸部分からつくられた綱領は不体裁であるが（だが、それはもちろんたいしたことではない）、そうでない綱領はまったくまちがつたものとなる。たとえどんなに気にいらなかつたとしても、またどんなに釣合いがとれていなかろうと、われわれは、この異種性から、いろいろな材料でつくられているこの構成から、非常に長いあいだぬけただけだすことができないであらう。それからぬけだすときになったら、われわれは別の綱領

をつくることにしよう。だが、そのときには、われわれはすでに社会主義社会に生活していることであろう。そうになったときでも事情は今日と同じであろうと主張することは、こっけいであろう。

いまわれわれは、資本主義の、いくたのもっとも原始的な基本的諸現象が復活している時期に生きている。たとえば、われわれ自身がきわめてよく——悪く、といったほうが正確であろう——体験している運輸組織の崩壊なりと、とつてみたまえ。これは、他の国々にも、戦勝国にさえおこっている。ところで、帝国主義体制のもとでの運輸組織の崩壊とは、なにを意味するであろうか？ 商品生産のもっとも原始的な形態への復帰を意味するのである。かつぎ屋とはどんなものかということ、われわれはよく知っている。この言葉は、これまで外国人には理解できなかったようである。だが、いまはどうか？ 第三インターナショナルの大会にやってきた同志諸君と話しあつてみたまえ。これと似た言葉が、ドイツにも、スイスにも、できはじめていることがわかる。ところで、このカテゴリーは、どんなプロレタリアートの独裁にもあてはめることはできないであろうし、そのためには、資本主義社会と商品生産との基底にかえらなければならぬ。

なだらかな、統一の綱領をつくることによって、このかなしむべき現実からぬけだそうとすることは、真空の世界に、超現世的なものなかとびこむこと、まちがった綱領を書くことを意味する。そして、われわれが旧綱領の数節をここに挿入した動機は、同志ブハリーンがものやわからかにほめかしたように、過去にたいする敬意ではけつしてない。つまり、こういうことである。一九〇三年の綱領は、レーニンが参加して書いたものである。この綱領の出来がわるいことは疑いない。けれども、老人連中は昔のことを回想することがなによりも好きなので、古いものに敬意をはらつて、古いものをくりかえしている新しい綱領を、新しい時代につくつたのだ、と。もしこれが本当なら、そういう変人たちを、あざけつてよいであろう。だが、これは本当でないことを、私は断言する。一九〇三年に記述されたような資本主義は、まさに帝国主義が解体したため、それが崩壊したため、一九一九年のソヴェト・プロレタリア共和国にもまだのこっている。たとえば、そういう資本主義は、モスクワからあまり遠くないサマラ県にも、ヴァトカ県にも、見いだすことができる。内戦のために国が分断されている時期には、われわれは、この状態から、このかつぎ屋商売から、すぐにはぬけだすことができないであろう。以上

の理由で、綱領のこれ以外の構成は正しくないであろう。われわれは、あるがままのものをかたならなければならぬ。綱領は、絶対に争う余地のないものを、実際にたしかめられているものを、ふくむものでなければならぬ。そのばあいだけに、それはマルクス主義的な綱領となるのである。

同志ブハーリンは、理論上はこのことを十分理解している、綱領は具体的でなければならない、と述べている。しかし、理解することと実行とはべつである。同志ブハーリンの具体性とは、金融資本主義を書物ふうに叙述することである。現実には、われわれは異質的な諸現象を目撃している。どの農業県でも、われわれは、独占化された工業とならんで、自由競争を目撃している。いくたの部門において自由競争をとまわらないような独占資本主義は、世界のどこにも存在したことはないし、これからも存在しないであろう。そういう体制を書くということは、生活と切りはなされた、まちがった体制を書くことである。マルクスがマニユファクチュアのことを、それは大量的な小規模生産のうえに立つ上部構造であると言ったとすれば、〔資本論、青本文庫版、第三冊、六〇九ページ〕、帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。その上層を破壊するなら、古い資本主義が現れ

るであろう。古い資本主義をとまわらない純一の帝国主義というようなものがあるという見地をとることは、希望を現実ととりちがえることを意味する。

これは、きわめて陥りやすい自然な誤りである。また、もしわれわれが資本主義を徹底的につくりかえた、純一の帝国主義に当面しているのだったら、われわれの任務は、いまの十万倍もたやすいであろう。それだつたら、すべてのものが金融資本ただ一つに従属せられていく体制ができていたであろう。それだつたら、上層をとりぞいて、あとのこるものをプロレタリアートの手に引きわたすだけでよかったであろう。これは、非常に愉快なことであろうが、現実にはそういうものは存在しない。帝国主義は資本主義のうえに立つ上部構造である。帝国主義が瓦解するときにわれわれが当面するのは、上層の破壊と、基底の露出とである。われわれの綱領が正しいものでありたいとのぞむならば、あるがままのものを言わなければならないというのは、こうしたわけからである。存在するものは、いくたの分野で帝国主義にまで成長した古い資本主義である。その傾向は、もっぱら帝国主義的なものである。根本的な問題は、もっぱら帝国主義の見地からのみ検討することができる。国内政治でも、対外政治でも、大きな問題で、この傾向の見地以外

の見地から解決できるような問題は、一つもない。だが、綱領がここで述べているのは、そのことではない。現実には、古い資本主義という、きわめて広大な基層が存在している。また帝国主義という上部構造があり、この上部構造が戦争を引きおこし、その戦争からプロレタリアートの独裁の端緒が生まれた。諸君はこういう局面からぬけだすことはできないだろう。この事実は、全世界におけるプロレタリア革命の発展の速度そのものを特徴づけており、まだ多くの年月のあいだ、引きつづいて事実であろう。

西ヨーロッパの革命は、おそらく、もつとならかにすすむであろうが、それでも、全世界を再組織するためには、大多数の国々を再組織するためには、きわめて多くの年月が必要である。だが、このことは、いまわれわれが繰返しつつある過渡期には、この寄木細工的な現実からぬけだすわけにはいかないことを、意味している。異質的な諸部分からなるこの現実が、どんなに垢ぬけないものであっても、それを捨てざるわけにはいかないし、たとえ一粒でもそれからとりのぞくわけにはいかない。いま書かれているものとちがったふうに書かれた綱領は、まちがったものになるであろう。

われわれは、独裁に到達したとかたっている。しかし、

どう、い、う、に、して、これに到達したかを、知らなければならぬ。過去はわれわれをおさえつけ、幾千の手でわれわれをつかんで、一步も前進させないか、あるいは現在われわれがやっているように、まずいやりかたですすむほかにようにしている。だから、われわれは言うのである。いまわれわれがどういう状態に到達しようとしているかを理解するためには、われわれがどのようにしてすすんできたか、なにがわれわれを社会主義革命そのものに導いたかを、言わなければならない。われわれをここまで導いたものは帝国主義であり、原始的な商品生産形態における資本主義であった。こうしたことをすべて理解しなければならぬ。というのは、たとえば中農にたいする態度のような問題は、現実を考慮に入れなければ、解決できないだろうからである。実際、純帝国主義的な資本主義の時代に、どこから中農がやってきたのだろうか？ 単純な資本主義国にさえ、中農などは存在していなかったではないか。もっぱら帝国主義とプロレタリアートの独裁との見地に立つて、このほとんど中世的な現象（中農）にたいするわれわれの態度の問題を決定するなら、全然つじつまのあわないことになり、多くの困難にぶつかるであろう。だが、もしわれわれが中農にたいする自分の態度を変えなければならぬのなら、

——それなら、中農がどこからやってきたか、中農とはどういうものかを、理論的部分のなかでも述べるようにつとめたまえ。中農は小商品生産者である。これは、われわれの言わなければならない資本主義のいろはである。というの、われわれはまだこのいろはからはいだしてないからである。このことをすておいて、「われわれはすでに金融資本主義を研究したのに、なぜいろはを勉強しなければならぬのか！」と言うのは、きわめてふまじめなやりかたであろう。

民族問題についても、私は同じことを言わなければならない。ここでも、同志ブハーリンは希望を現実ととりちがえている。彼は言う。民族の自決権を承認するわけにはいかない。民族といえ、ブルジョアジーとプロレタリアートがいっしょになったものである。われわれプロレタリアが、どこかの軽蔑すべきブルジョアジーの自決権を承認しようとは！これはまったく理屈に合わない！と。いや、失礼だが、それは現実と合致しているのである。もし君がこれを削除するなら、空想的なものができあがるであろう。君は、民族の内部におこなわれている分化の過程を、プロレタリアートとブルジョアジーの分離の過程を、引合いにだしている。しかし、この分化がどういうふうにおこなわれているかを、見てみよ

う。

たとえば、ドイツをとって見たまえ、これは、資本主義の、金融資本主義の、組織性の点でアメリカにまさる先進資本主義国の、模範である。ドイツは、多くの点で、技術と生産の点で、政治上の点でアメリカにおとつていたが、金融資本主義の組織性の点では、独占資本主義の国家独占資本主義への転化の点では、アメリカにまさっていた。これは模範国であるとおもわれよう。ところで、このドイツでどういことがおこっているだろうか？

ドイツのプロレタリアートはブルジョアジーから分化したであろうか？ いな！報道によれば、労働者の大多数がシャイデマン派に反対しているのは、いくつかの大都市だけだというではないか。だが、どうしてそんなことになったのであろうか？これは、スバルタクス派^{*}が、あのかさねがさねのろわれた、「ドイツの」メンシエヴィキである独立社会党と同盟をむすんでいるためである。この独立社会党は、なにもかもごっちゃにして、ソヴェト制度と憲法制定議会とを結婚させようとのぞんでいるのだ！これが、この当のドイツでおこなっていることなのだ！しかも、これが先進国なのだ。

同志ブハーリンは言う。「民族自決権がなぜわれわれに必要なのか？」と。一九一七年の夏に同志ブハーリン

が最小限綱領を削除し、最大限綱領だけをのこすように提議したとき、私が彼に反対して言ったことを、私はくりかえして言わなければならない。そのとき私は彼にこたえてこう言った。「出陣のさいに自慢するな。帰陣のさいに自慢せよ」と。われわれが権力を獲得し、そのうえしばらく様子を見てから、そうしよう、と〔全集、第二六一四六〕さて、われわれは権力を獲得したし、しばらく様子も見た。いまは私はそうすることに同意する。われわれは社会主義建設に没頭しており、われわれをおびやかした最初の襲撃を撃退した。——いまではそうすることは適當である。民族の自決権についても、これと同じである。「私は勤労諸階級の自決権だけを承認したい」と同志ブハーリンは言う。つまり君は、現実にはロシアをのぞいてどの国でも達成されていないものを承認しようというのだ、これはこっけいである。

フィンランドを見たまえ。フィンランドは、わが国よりも発展した、いっそう文化的な民主国である。そこでは、プロレタリアートの分離、分化の過程がすすんでいる、独特の仕方、わが国にくらべてずっと苦痛の多い仕方ですんでいる。フィン人はさきにドイツの独裁を経験したが、いまや連合国の独裁を経験している。だが、われわれが民族の自決権を承認したため、そこでの分化

の過程は容易になっている。私は、フィンランドのブルジョアジーの代表者で絞刑吏の役を演じたスヴィンヴード——ロシア語に翻訳すると、これは「豚の頭」という意味である——に、スモルヌイである国書を手渡ししなればならなかったときの光景を、よくおぼえている。スヴィンヴードは愛想よく私の手をにぎりしめ、私たちは挨拶をとりかわした。それはなんといいなことだったろう！だが、そうしなければならなかったのである。なぜなら、その当時にはこのブルジョアジーは、人民を欺いており、モスカーリ＊、排外主義者、大ロシア人はフィン人の息の根を止めたがっている、と言って、勤労者を欺いていたからである。われわれはそうしなければならなかった。

そして、きのうはこれと同じことを、バシキール共和国にたいしてもやらなければならなかったではないか？同志ブハーリンが「あるものについてはこの権利を承認してもよい」と言ったとき、彼のこのリストには、ホッテントット人やブッシュメン人やインド人はいっていないことを、私はわざわざ書きとめておいた。私は、こういうふうにかぞえあげられるのを聞きながら、考えた。同志ブハーリンがあるさやかな些事をわすれたのは、すなわちバシキール人をわすれたのは、どうしてだろう

か、と。ロシアにはブッシュメン人はいないし、ホットエントット人についても、彼らが自治共和国を要求したということは聞いていないが、わが国にはバシキール人、キルギス人、その他いくたの民族がいるではないか。彼らにたいして自決権の承認を拒否することはできない。

旧ロシア帝国の国境内に住む諸民族のどれにたいしても、われわれはこれを拒否することはできない。バシキール人が擄取者を打ちたおし、われわれが彼らがそうするのをたすけるとさえ仮定しよう。だが、これは、変革が完全に成熟したばあいには、やれないことである。また、われわれが干渉したために、われわれが促進しなければならぬ当のプロレタリアートの分化の過程をかえっておくらせることのないよう、慎重にそれをやらなければならぬ。これまでムルラー*の影響のもとにあったキルギス人やウズベク人や、タジク人や、トルクメン人のような民族にたいして、われわれはいたいたいなにをすることができただろうか？ わがロシアでは、住民は永年坊主についての経験を積んでいたもので、彼らはわれわれが坊主をたおすのに協力した。しかし、諸君も知っているのとおり、非教会結婚（宗教的儀式によらない結婚）についての命令はまだわずかしか実行されていない。われわれはこれらの民族にむかつて、「諸君の擄取者たちをたおそう」と呼び

かけることができるであらうか？ われわれはそうすることはできない。というのは、彼らはまったくそのムルラーに従属しているからである。このばあいには、われわれは、この民族が発展し、プロレタリア的分子とブルジョア的分子とが分化するまで待たなければならぬ。かならずそうなるにきまつているからである。

同志ブハーリンは待とうとしない。彼は焦燥の念におそわれている。「どういうわけだ！ われわれ自身ブルジョアジーをたおし、ソヴェト権力とプロレタリアートの独裁とを宣言したのに、どういうわけでそんなふうにふるまわなければならないのか！」と。こういう宣言は、人を鼓舞する呼びかけの働きをするし、われわれのすむべき道の指示をふくんでいるが、もしわれわれが綱領のなかでこのことを宣言するだけにとどめるなら、綱領ではなくて、宣言文ができあがるであらう。われわれは、ソヴェト権力とプロレタリアートの独裁を宣言し、ブルジョアジーにたいする完全な軽侮を宣言してもよいが——そして、彼らはそういう軽侮を千度でもうける値打ちがある——、綱領のなかでは、あるがままのものを絶対に正確に書かなければならない。そうしてこそ、われわれの綱領は、争う余地のないものになるのである。われわれは、階級的な立場を厳守する。われわれが綱

領に書くことは、われわれが民族自決一般を論じていた時代以後に、現実におこったことの承認である。その当時には、まだプロレタリア共和国はなかった。プロレタリア共和国が出現したときに、またそれが出現するのにおうじて、われわれはここに書いたことを書けるようになったのである。すなわち「ソヴェト型に組織された諸國家の連邦的結合」を、ソヴェト型といっても、ロシアに存在しているようなソヴェト型ではない。しかし、ソヴェト型は、國際的なものになりつつある。われわれが言えるのは、このことだけである。これを一步でもこえてすすむこと、これを髪の毛一筋でもこえてすすむことは、すでにまちがいであろうし、したがって綱領にはふさわしくない。

われわれは言う。その民族が、中世的制度からブルジョア民主主義にいたり、そしてブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義にいたる道のどの段階にいるかを、考慮に入れなければならない、と。これは絶対に正しいことである。ホッテントット人やブッシュメン人を取りたてていうまでもなく、すべての民族が自決の權利をもっている。圧倒的多数者、おそらく地球の全人口の一〇分の九、おそらく九五%が、この特徴づけにあてはまるであらう。なぜなら、すべての国が、中世的制度からブ

ルジョア民主主義にいたる道か、またはブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義にいたる道にいるからである。これはまったく避けることのできない道である。これ以上のことを言うことはできない。なぜなら、それはまちがいだらうからである。それはあるがままのものではないだらうからである。民族の自決を削除して、勤

勞者の自決をもちだすということは、まったくまちがっている。なぜなら、そういう問題の立て方は、各民族の内部の分化が、どのように困難しながら、またどういう曲りくねった道をおりながらすすんでいるかを、考慮しないからである。ドイツでは、わが国とはちがった行き方ですすんでいる。ある点ではもっと急速に、ある点ではもっとゆっくりとした、血なまぐさい行き方ですすんでいる。わが国では、ソヴェトと憲法制定議会との組み合せというような奇怪な考えを受け入れた党は、一つもなかった。だが、われわれは、これらの民族とならんで生活していかなければならない。シャイデマンらは、われわれがドイツを征服したがつていって、いまなお言っている。もちろん、これは笑うべきことであり、でたらめである。しかし、ブルジョアジーには彼ら自身の利益があり、何億もの部数で全世界にむかつてそうさげびたてている自分の新聞がある。そしてウィルソンは、自

分の利益からそれを支持している。ポリシエヴィキは大軍をもっており、征服の手段によって自分のポリシエヴィズムをドイツに植えたがっている、というのである。ドイツのもっともすぐれた人々——スバルタクス派

——がわれわれに言ったところでは、ドイツの労働者を共産主義者にけしかけているという。ポリシエヴィキのところではどんなにひどいさまか、見たまえ、と。

そして、われわれのところでは物ごとがたいへんうまくいったとは、われわれも言うわけにはいかない。そこで、ドイツにおけるわれわれの敵は、ドイツにプロレタリア革命がおこれば、ロシアと同じような乱脈に陥ることになるのだという議論で、大衆に働きかけている。わが国の乱脈は、われわれの長い病いである。わが国にプロレタリア独裁をつくりだそうとして、われわれは、途方もない困難とたたかっている。ブルジョアジーまたは小ブルジョアジーが、あるいはドイツの一部の労働者さえが、「ポリシエヴィキは自分の制度を力づくで打ちたてたがつている」というこのおどし文句に影響されているあいだは、「勤労者の自決」という定式は事態を改善しないであろう。ポリシエヴィキは自分の普遍的制度をおしつけようとしている——まるで赤軍の銃剣によってそれをベルリンにもちこむことができるかのように——と、ド

イツの社会裏切者たちが言えないような仕方では、われわれは問題を立てなければならない。だが、民族自決の原則を否認する立場をとれば、そういうことになりかねないのである。

われわれの綱領は勤労者の自決を論じてはならない。なぜなら、それはまちがっているからである。綱領は、あるがままのものを言わなければならない。諸民族が、中世的制度からブルジョア民主主義にいたり、そしてブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義にいたる道のさまざまな段階にいる以上は、われわれの綱領のこの命題は絶対に正しい。われわれは、この途上できわめて多くのジグザグを経てきた。どの民族も自決権を獲得しなければならぬ。そして、そのことが勤労者の自決を促進するのである。フィンランドでは、プロレタリアートとブルジョアジーとの分離の過程は、いちじるしくくつきりと、力づく、深くすすんでいる。そこでは、どのみち万事はわが国と同じようにはすすまないであろう。もしわれわれが、どんなフィンランド民族も承認せず、勤労大衆だけを承認すると言うとすれば、それはまったくつまらぬ言草になるだろう。現にあるものを承認しないわけにはいかない。それは、いやおうなしに自分を承認させるであろう。プロレタリアートとブルジョアジー

との分離は、国がちがえば独特の道をたどってすすんでいる。この道では、われわれはきわめて慎重に行動しなければならぬ。さまざまな民族にたいして慎重にふるまうことがとくに必要である。なぜなら、民族を信頼しないということほど、悪いことはないからである。ポーランド人のあいだでも、プロレタリアートの自決は進行している。ここにワルシャワの労働者代表ソヴェト^{*}の構成についての最新の数字がある。それによると、ポーランドの社会裏切者は三三三人、共産主義者は二九七人である。これでわかるように、われわれの革命暦によれば、ポーランドの、十月はもはや遠くはない。それは、一九一七年の八月か九月である。しかし、第一に、すべての国がボリシェヴィキの革命暦にしたがって生活しなければならぬという命令はまだ出ていないし、またそういう命令がだされても、実行されはしないであろう。また、第二に、わが国の労働者よりもすすんでおり、いっそう文化的なポーランドの労働者の大多数が、社会祖国防衛主義、社会愛国主義の見地に立っているのが、現状である。われわれは待たなければならぬ。こういうばあいに、勤労大衆の自決をかたてはならない。われわれは、そういう分化を宣伝しなければならぬし、また宣伝しているが、しかし、ポーランド民族の自決をただちに承

認しないわけにいかないことは、一点の疑いもない。これは明らかである。ポーランドのプロレタリア運動は、われわれの運動と同じ道をたどってすすんでおり、プロレタリアートの独裁にむかってすすんでいるが、ロシアと同じ行き方ですんでいるわけではない。そして、ポーランドの労働者は、モスクワの連中、いつもポーランド人を抑圧してきた大ロシア人たちが、共産主義という名のもとにかくされた自分たちの大ロシア人排外主義をポーランドにもちこもうとしている、といって、おどしつけられている。共産主義は暴力によって植えつけられるものではない。私が、ポーランドの共産主義者のものともすぐれた同志の一人にむかって、「君たちはちがったやり方をするでしょう」と言ったとき、彼は私にこうこたえた。「いや、われわれも諸君と同じことをやるけれども、もっとうまくやります」と。こういう論法にたいしては、私はまったくなんの異議もとなえることはできなかった。われわれよりもっとうまくソヴェト権力をつくらうという、つましい願望をみたとす機会をあたえなければならぬ。彼らの国では事態はいくらか独特の道をたどってすすんでいることを、考慮に入れないわけにはいかないし、また「民族の自決権をたおせ！ われわれは勤労大衆にたいしてのみ自決権をあたえる」な